

レジェンドから日本初紹介作家まで、11作家が映し出す英国アール・ブリュットの現在地

アール・ブリュット ゼン&ナウ Vol.4

未知なる世界と出会う — 英国アール・ブリュット作家の現在 いま

2025年6月21日(土) ~ 8月31日(日)



Art Brut Then and Now Vol.4

The Meeting Place
of Unveiled Worlds

ゲスト・キュレーター=ジェニファー・ギルバート

Saturday, 21 Jun -
Sunday, 31 August 2025

2025 6.21^④ ~ 8.31^⑧



— 英国アール・ブリュット作家の現在

出会う

未知なる世界

東京都渋谷公園通りギャラリーでは、2025年6月21日(土)から8月31日(日)まで、アール・ブリュット ゼン&ナウ Vol.4「未知なる世界と出会う — 英国アール・ブリュット作家の現在 (いま)」を開催いたします。

ゲスト・キュレーターに、英国を拠点にアール・ブリュット/アウトサイダー・アート分野のキュレーターやギャラリストとして活躍するジェニファー・ギルバート氏を迎え、世界的に評価の高いレジェンド作家マジ・ギルやスコッティ・ウィルソンから新進気鋭の作家まで、幅広い世代の11名の英国アーティストによる多様な作品世界をご紹介します。

日本初公開となる作品が多数来日し、白黒の部屋とカラフルな部屋により、鑑賞者を未知なる世界へと誘います。

本展ゲスト・キュレーター

ジェニファー・ギルバート Jennifer Gilbert

イギリスを拠点にギャラリスト、フリーランスのプロデューサーやキュレーターとして活動。2008年より、障害のある作家、神経多様性(ニューロダイバーシティ)の作家、独学の作家と国際的に協働してきた。2017年には「ジェニファー・ローレン・ギャラリー」を設立。見落とされがちなアーティストたちの作品を紹介し、彼らの活動を支援することを目的とし、世界各地の美術館やギャラリーで展覧会の開催や、アートフェアへの参加を行う。また、障害のある作家に対して、専門キャリアの支援やメンタリングを行うほか、美術館等でのアクセシビリティやインクルージョンに関するコンサルタント活動も行っている。



図版① ジェニファー・ギルバート

このリリースにかかるお問い合わせ/取材お申し込み

東京都渋谷公園通りギャラリー 広報担当

(公財)東京都歴史文化財団 東京都現代美術館 文化共生課

Tel : 03-5422-3151 Fax : 03-3464-5241 E-mail : pr-skdg@mot-art.jp

1. 英国の多世代・多様なアール・ブリュット作品が集結

マッジ・ギルをはじめとした英国アール・ブリュット分野のレジェンド作家のほか、日本初紹介となる新進気鋭の作家の作品も多数来日。英国人キュレーターが注目する幅広い世代の作品を紹介することで、英国アール・ブリュットの現在地を映しだします。絵画に立体作品、素材や手法も様々な11名の作家それぞれの、緻密で繊細かつエネルギッシュな表現は見ごたえがあり、独自の作品世界にひきこまれます。

2. 白黒の部屋とカラフルな部屋、2つの展示室

出展作品を白黒の作品とカラフルな作品で分け、2つの展示室で紹介。白黒の作品が並ぶクラシカルな雰囲気のある部屋では女性がモチーフの作品のほか、優美で有機的な形や線が印象的な作品が展示されます。一方で、カラフルでポップな印象を受ける部屋では、不思議な生き物や、どこか懐かしいカメラなど、多彩なモチーフの作品が並びます。印象の異なるそれぞれの展示室で、想像力をかきたてる作品をお楽しみいただけます。

3. ゲスト・キュレーターが来日、関連イベント開催

- ジェニファー・ギルバートによるオープニングトーク（日英通訳、手話通訳付き）日時：6月21日（土）15:00-16:30
英国でのアール・ブリュット分野の状況や作家支援活動について、ギルバート氏が話します。
- ジェニファー・ギルバートによるギャラリーツアー（日英通訳、手話通訳付き）日時：6月22日（日）14:00-15:00
- 英国のアール・ブリュットを知る動画や資料を展示
交流スペースでは、作家本人が自らを語るインタビュー動画や作家が活動する英国のアート・スタジオなどを紹介します。

アール・ブリュット（Art Brut）とは

1940年代にフランスの芸術家ジャン・デュビュッフエによって提唱されたことばで、今日ではひろく専門的な美術の教育を受けていない人などによる、独自の発想や表現方法が注目されるアートを表します。1970年代にはイギリスで英語訳され、「アウトサイダー・アート」という呼称が生まれました。当ギャラリーの「アール・ブリュット ゼン&ナウ」は、国内外のアール・ブリュット/アウトサイダー・アートの動向において、長く活躍を続ける作家と、近年発表の場を広げつつある作家を、さまざまな角度から紹介する展覧会シリーズです。

展覧会概要

展覧会名	アール・ブリュット ゼン&ナウ vol.4 「未知なる世界と出会う —英国アール・ブリュット作家の現在（いま）」
会期	2025年6月21日（土）-8月31日（日）
開館時間	11:00-19:00
休館日	月曜日（7/21、8/11は開館）、7/22、8/12
会場	東京都渋谷公園通りギャラリー 展示室1・2、交流スペース （東京都渋谷区神南1-19-8 渋谷区立勤労福祉会館1F）
入場料	無料
ゲスト・キュレーター	ジェニファー・ギルバート（ジェニファー・ローレン・ギャラリー）
出展作家	マッジ・ギル、アンドリュー・ジョンストン、ナイジェル・キングスベリー、カーラ・マクウィリアム、ターザ・マイルハム、キャメロン・モーガン、ジュシー・ジェームズ・ネーゲル、ヴァレリー・ポッター、キャシー・ウォード、テレンス・ワイルド、スコッティ・ウィルソン *アルファベット順
主催	東京都渋谷公園通りギャラリー（公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都現代美術館）
協力	ジェニファー・ローレン・ギャラリー
後援	ブリティッシュ・カウンシル
展覧会ウェブサイト	https://inclusion-art.jp/s/unveiled
問い合わせ	inclusion@mot-art.jp



出展作家紹介

※テキスト：ジェニファー・ギルバート

マッジ・ギル

Madge Gill (1882~1961)

英国で最も有名な女性アウトサイダー・アーティストとして知られる。複雑な模様背景の中に浮かぶ、神秘的な女性の顔を描いた特徴的なインク画は、1920年代に、創造したいという本能的な衝動に駆られて始まったものである。自分が「ミルニネレスト」という名の精霊に導かれていると信じていたことから、ギルは、精霊の力によって自動的に生み出されたという芸術作品を数多く残している。制作にあたっては、大きなキャラコ（平織り木綿布）から、ポストカードや厚紙まで、さまざまな媒体が使用された。



図版② マッジ・ギル《Untitled》1945年頃
Madge Gill, *Untitled*, c.1945, Collection of Adam Whitaker, Photo by Laura Hutchinson

アンドリュー・ジョンストン

Andrew Johnstone (1986~)

ジョンストンの絵を描くことに対する情熱は、幼い頃から家族によって育まれてきた。また絵を描くことは、家族とコミュニケーションをとる手段としても非常に重要な役割を果たしていた。例えば、これからどこに行き、誰と会うのかということ、絵で説明することができた。ジョンストンは、ドローイングや陶芸などの緻密な作品を明確な意図をもって制作している。実際に見たものや、インターネット上で目にしたものを中心として、動物や何かの出来事について作品にすることが多い。



図版③ アンドリュー・ジョンストン《Untitled (Orangutan)》2020年
Andrew Johnstone, *Untitled (Orangutan)*, 2020,
Courtesy the artist and Venture Arts, Photo by Laura Hutchinson

ナイジェル・キングスベリー

Nigel Kingsbury

(1949~2016)

女性の姿かたちに魅了され、独自のマークメイキングのスタイルを用いて、魅惑的で豪華なイブニングドレスや、退廃的な衣装、浮遊感のあるドレスに身を包んだ神秘的な女神としての女性を、優美にして繊細に描き出している。最初に描かれるときにはヌードであることが多く、その後、細かなスケッチ線を何層にも重ねて布のひだを付け加えていく。キングスベリーの作品は、自分にインスピレーションを与えた女性たちに捧げられている。



図版④ ナイジェル・キングスベリー《Untitled》制作年不詳
Nigel Kingsbury, *Untitled*, n.d., Courtesy of ActionSpace, Photo by Laura Hutchinson

カーラ・マクウィリアム

Cara Macwilliam (1972~)

エネルギーに魅了された、さまざまな表現分野で活躍するアーティストである。そのエネルギーとは、物理的なもの、感情的なものから始まって、形而上学的なものまで幅広い。マクウィリアムの作品は、刹那的な存在、エネルギー、異世界の痕跡を捉えている。使用されている素材によって、さまざまなスタイルが生み出され、その一つ一つが、独特の声と流れを持っている。何層にも重なる複雑な作品が多く、そこには常に直感と目に見えない力が働いている。また、オートマティズムのプロセスを好んでいる。



図版⑤ カーラ・マクウィリアム《Fragmented Whispers of Instability》2025年
Cara Macwilliam, *Fragmented Whispers of Instability*, 2025,
Courtesy the artist and Jennifer Lauren Gallery, Photo by Laura Hutchinson

ターザ・マイルハム

Tirzah Mileham

(1971~)

20年前から Submit to Love Studios に所属するアーティストとして、週に何時間も費やして、芸術への情熱を探究している。マイルハムの一連の作品には、その技術の奔流と色の飛沫とが見られるが、最近では単色のドローイングで紙面を隅々まで埋め尽くすことによって、想像力を駆け巡らせている。



図版⑥ ターザ・マイルハム《When Women and Fish Took Over the World》2022年
Tirzah Mileham, *When Women and Fish Took Over the World*, 2022,
Courtesy the artist and Submit to Love Studios

キャメロン・モーガン

Cameron Morgan

(1965~)

1991年からグラスゴーのプロジェクト・アビリティ・スタジオで活動する、多才にして多作なアーティストだ。絵画、陶芸、刺繍などさまざまな分野で、明るく「ポップな」色使いの作品を制作している。モーガンの作品ではドローイング、特に線が重要だ。モーガンは、はっきり見える部分は省略し、見過ごされがちな部分を強調する。そうすることで、主題の本質に到達することができるのである。今回の展示では、モーガンの、カメラに注ぐ愛情に焦点を当てている。



図版⑦ キャメロン・モーガン《Say Cheese》2024年
Cameron Morgan, *Say Cheese*, 2024,
Courtesy the artist and Project Ability, Photo by Jack Wrigley

ジェシー・ジェームズ・ネーゲル

Jesse James Nagel (1993~)

ロンドンを拠点に活動するネーゲルは、創作活動に爽快感を感じている。そして、「リラックスできるチェスとは違って、アクション満載な感覚がある。何が起るかわからない」と言う。ネーゲルは、無計画な数枚の鉛筆スケッチから制作を始め、それから潜在意識に導かれるように、最終結果がわかっている「つまらない」と思いながら、自分の手が作品を生み出していくのを感じるのである。細部を描き込み、色を足していきながら制作を進め、それに合わせてタイトルも進化していく。



図版⑧ ジェシー・ジェームズ・ネーゲル《Every Gay Boy Detests Fanny》2023年
Jesse James Nagel, *Every Gay Boy Detests Fanny*, 2023,
Courtesy the artist and Jennifer Lauren Gallery, Photo by Laura Hutchinson

ヴァレリー・ポッター

Valerie Potter (1954~)

マーゲイトを拠点に活動するポッターは、常に創造性を発揮してきたのにもかかわらず、自分を芸術家だとは思っていなかった。19歳の時に英国の美術学校に入学したものの、制約が多いと感じて退学し、自宅で絵を描き続けた。そのクロスステッチの作品では、顔、動物や植物、愛と、非宗教的な神々とが結び合わされていることが多い。抽象的なアイデア（たとえば、火星に咲く花のような）が頭に浮かぶと、それを鉛筆で描き、思いもよらない、明るい色で、時間をかけてクロスステッチ作品にする。



図版⑨ ヴァレリー・ポッター《Untitled》2020年
Valerie Potter, *Untitled*, 2020,
Courtesy the artist and Jennifer Lauren Gallery, Photo by Ellie Walmsley

キャシー・ウォード

Cathy Ward (1960~)

幼少期、アイルランドの慈善修道女会が運営する私立修道院に送られた。この経験はウォードとその作品に、長く続く、深い影響を与えた。ロイヤル・カレッジ・オブ・アート（RCA）を卒業した後、カナダで精神面でも、創造性の面でも人生が一変するような経験をし、それからロンドンに戻った。毛髪、地層、エネルギーのパルスと解釈される、極めて優美でありながら、強烈なドローイングで知られている。



図版⑩ キャシー・ウォード《Unite》2017-19年
Cathy Ward, *Unite*, 2017-19, Courtesy the artist

テレンス・ワイルド

Terence Wilde (1963~)

ロンドンを拠点に活動するアーティスト兼教育者のワイルドは、テキスタイルで学位を取得したが、クロイドンのボランティアセクターが提供する精神保健サービスを通じて改めて教育を受けた。ワイルドのどのモノクロ作品の中にも、ゲイであり、成人サバイバーという視点から、自らのメンタルヘルスの遍歴が描かれている。主に線描や陶芸を用いた作品には、人生のさまざまな時期に対する反応としての、苦悶や、恐怖や、夢が表現されている。



図版⑪ テレンス・ワイルド《Orientation》2025年
Terence Wilde, *Orientation*, 2025,
Courtesy the artist and Jennifer Lauren Gallery, Photo by Laura Hutchinson

スコットィ・ウィルソン

Scottie Wilson (1891~1972)

ロバート・“スコットィ”・ウィルソンは、1931年にグラスゴーからトロントに移り住んだ。1930年代に絵を描き始め、白鳥、鳥、魚、木、花など、夢の中にいるような生き物を、インクを用いて、非常に激しいスタイルで描くようになった。1945年初頭にロンドンに戻ってからもこのスタイルでの創作を続けていたが、まもなく、ロンドンのシュルレアリストたちから注目されるようになる。ウィルソンは、植物の形、鳥や動物、ピエロ（自画像）、「強欲者」や「悪魔」（悪意の擬人化）といった、比較的限られた範囲の視覚的要素に依拠している。



図版⑫ スコットィ・ウィルソン《Masquerade》1935年
Scottie Wilson, *Masquerade*, 1935,
Collection of Adam Whitaker, Photo by Laura Hutchinson

図版⑬ 展覧会ポスター画像



東京都渋谷公園通りギャラリー 広報担当 行

E-mail : pr-skdg@mot-art.jp Fax : 03-3464-5241

取材および広報用画像について

本展覧会の取材を希望される場合は、本紙に必要な事項をご記入の上、EメールまたはFAXにてお申し込みください。
また、このリリースに掲載されている画像①～⑬をデータにてご用意しております。画像を希望される場合は、希望画像の番号（ここに掲載されていない画像も相談可）をご記入の上、広報担当までご連絡ください。

取材希望

画像使用希望

取材希望日時：	
使用希望画像：	
貴社名：	
貴媒体名：	
種別：	TV ラジオ 新聞 雑誌 フリーペーパー WEB その他（ ）
掲載・放送予定日：	
ご担当者名：	
Eメールアドレス：	
ご住所：	(〒)
お電話番号：	
FAX：	
その他：	

なお、取材および写真使用に際しましては、以下のことをお願いしております。

- ・ 作品画像を掲載する際は、当該作品のクレジット（作家名・作品名・制作年・所蔵・コピーライト）を必ず明記してください。但し、画像に添えた「※～」の記述は、省略可。
- ・ 掲載画像のトリミング、文字載せはお控えください。
- ・ 記事掲載・放送日が決まりましたら、事前にご連絡ください。併せて、掲載内容もお知らせいただけますと幸いです。